

NPO

福島から避難した母子に寄り添う息の長い支援を

米沢市

佐藤 洋 NPO りとる福島避難者支援ネットワーク

取材日 2013.12.20

NPO りとる福島避難者支援ネットワーク代表。福島県から山形県に避難してきた人同士と一緒に助け合いながら前に進んでいくためのメーリングリスト「りとる福島」をベースに誕生した自主避難者による団体。山形県米沢市では、NPO法人おいたまサロンとの協働により、福島県から避難している方々のフリースペース「ふわっと」を開設し、避難者に寄り添った支援を続けている。

3月11日 14時46分

山形市の商店街でバイオディーゼル燃料を製造する仕事をしていました。コンビニで油を回収している時に揺れたので、びっくりして思わず声をあげた。経験上、地震はすぐに収まるものだと思っていたが、揺れが長く続いたのでだんだん不安になっていった。

職場に戻ると停電していて、立体駐車場の蛍光灯は消え、ゲートも一切作動しなかった。困っていると管理員の方が手でゲートを開けてくれた。同僚達と今日の勤務をどうするか話し合った結果、停電でインターネットにつながらず仕事にならないため帰る事にした。この時点ではまだ地震についての詳しい被害状況を把握しておらず、停電が起こったくらいにしか思っていなかった。しかし、停電は3日ほど続き、オール電化住宅の人はトイレのふたも開かず大変だったようだ。自宅の水道は無事で、ガスもプロパンガスだったので使う事ができた。明かりはろうそくを利用し、薪ストーブで暖を取った。

携帯電話でワンセグを見る事ができたので、その日のうちに津波の被害が甚大だと分かっていた。仙台市の荒浜で数百の死体があるようだという情報を聞いた時はびっくりした。もしかして現場が混乱していて、表現を間違っただけなのではないだろうかと思った。少し怖いと感じたが、なるべく考えないようにした。停電している間は車で携帯電話を充電しながら、ワンセグを見て情報を得ていた。

3月12日、福島第一原子力発電所事故の事を知って緊迫した空気に包まれた。もしもの事が起きた時はどうするか、すぐに夫婦でシミュレーションを行なった。

「毎週末山形」のネーミング

原発事故の後、福島の友人に、うちへ避難しに来てはどうかと連絡をした。3月19日くらいから友人達が避難するためにやって来て、一番多い時



で20人ほどが我が家に滞在していた。3月14日から20日まで会社を休み、原発問題について調べた。インターネット上にはたくさんの情報が溢れ、どれが正しい情報なのかを、東京の友人と相談しながら情報を集めていった。結果的に、即時に壊滅的な事態にはならなかった。予断が許される状態ではなかったが、大爆発とはならず、風向きも大部分が海に向かっていった。もっとも最悪の事態もあり得ると感じていたので、不幸中の幸いとも感じている。やがて僕の家へ避難していた知人達は、山形にアパートを借りる、親戚や知人を頼って九州に避難するなど、それぞれ身の振り方を決めた。

うちには誰もいなくなったが、福島周辺の詳しい情報だけが残った。今後は福島の人々が山形に避難しに来るだろうと思った。小さな子どもほど放射能の影響が心配だ。幼い子どもを持つ親を中心とした避難の動きがあると考え、4月にはサポートができるよう体制を整え始めた。「避難」は難しい家庭でも、福島を少しでも離れたいたいと考える親子が毎週末山形に来る事は難しくないだろう。週末に山形へ遊びに来てもらうような滞在をイメージした。公的な無償の借り上げ住宅がない頃だったので、農家の方に協力をお願いしてコツコツとステイ先を増やし、ショートステイやホームステイを斡旋する市民活動をしようと考えた。自宅に避難してきていた福島の友人が、「職場の放射線量が高いので仕事を辞めたい。」と電話で

上司に切り出す事に苦悩していたのを思い出す。これまでに例がなかったため、口に出す事はとてもためられたようだ。上司だってそこで働き続ける事が悩ましいかもしれない。最終的には上司に理解されたそうだが、この現実を見ていて放射能の話はデリケートであり、考えながら話さなければならないのだと思った。放射能は目に見えない。そして、怖がる事も安心する事もすべて本人の判断にゆだねられる。だからもしかしたら、放射能について話しづらい、避難しに来づらいと感じている人がいるかもしれないと考えた。山形に避難先を作るにしても、「避難」という言葉をタイトルにつけての周知では来づらい人もいるかもしれない。「毎週末山形」というネーミングは、悩んだ末に落ち着いた名前だった。

避難者のネットワークを形成

震災直後はガソリンスタンドでの給油や物資の確保など、緊急時の生活で精一杯だった。放射能の問題に対応するには、頭の切り替えに時間がかかった部分もあっただろう。米沢市には5月、南相馬市の警戒区域の人も自主避難の方も入れる唯一の避難住宅が早くも存在していた。定員は250名ほどで、あっという間に埋まってしまった。この避難住宅に入れた避難者は、情報に鋭く、早い段階で気づいて滑りこんだ人だ。ほとんどの人がこの情報を知らぬ間に、避難住宅は定員に達してしまっただけで、東北の気質であろうか、あまり故郷を離れたくない気持ちの強い人が多い。山形は、子どもを守りながらも何かあった時にはすぐに故郷へ帰れる、福島からとても身近な場所である。翌6月、山形県が福島県の全住民に対する無償借り上げ住宅の提供を発表した。6月16日から入居が始まると、堰を切ったように避難者がなだれ込み、賃貸住宅などはあっという間にいっぱいになってしまった。溢れた人は親子で1Kの部屋を借りるなど、大変な状況に追いやられている問題も浮上していた。県庁所在地である山形市でも借り上げを行なったが、5千人ほどの希望者があり、すぐに打ち止めになってしまった。2012年2月には、避難者数が約1万3千人になった。震災当初の山形では、福島に関する活動をしている方が少なかった。宮城に近い事もあり、大津波の被害が連日報道されていた事から、沿岸部の瓦礫撤去のボランティアに向かう方がほとんどだった。福島に縁があり、事情を知ってしまったのだから、福島の事は僕がサポートしなければ、という意識が自分の中にあっただけで進めていたホームステイ先のリサーチは、無償借り上げ住宅ができてからは終わりにして、最終的に山形での保養を助ける支援内容とした。そして避難し

ている皆さんがバラバラにならないよう、避難者のネットワークを作ろうと考えた。6月頃、出会った避難者の1人からメーリングリストを作ってもらえないかと相談を受けた。そうして作ったのが「りとる福島」というメーリングリストだ。最初の登録人数は7人だけだったが、どんどん増えて現在は400人ほどが登録している。登録者数を増やす事にこだわりはなかったが、自然と口コミで増えていった。

メーリングリストではさまざまな情報が行き交っていた。思い切って避難してきたものの、本当にこれでよかったのかと悩む方が多かった。あまりにも未知の世界である原発事故を、自分が人生で体験するとは誰もが思っていなかった事や、自分が今、マイノリティーになっている現実などを共有し合っていた。直感的に危険と判断して避難した人もいれば、よくよく調べてから避難の判断をした人もいる。そして誰もがこれでよかったのだろうかと思っていた。いろいろな認識の人がいると思う。国の制度で何とかなると思っている人もいれば、そうではないと思っている人もいて、実際のところ多くの事態に收拾がついていない。被災者の高速料金の無料化など、部分的な援助はあるが、避難者が本当に求めている事はいまだに解決されていない。避難してよかったとお墨付きをもらう事はできず、むしろ周囲からメンタル的におかしな人と誤解されてしまう可能性もある。不安だけが募り、塞ぎがちになる気持ちを明るく気持ちへと向かわせるきっかけが欲しいと考え、みんなで寄り添い話し合う会を催したところ、60人程が集まった。想いを共有してみると、原発事故で急な判断を求められる中で「距離を取る」という選択をした事は「間違いではなかった。」「よくやった。」と、参加者同士が互いを励まし合い、いつの間にか人のネットワークができていった。

おいたまサロンとの出会い

米沢市に避難した母子のために、一時託児や交流ができる施設「ふわっと」の開設をコーディネートした。震災前から障がい者や高齢者を対象にしたふれあいサロンを運営しているNPO法人おいたまサロンが、事務所の2階を避難者向けサロンにリフォームする事を決断してくれた。それまで、2階は廃材が積まれた物置の状態だった。おいたまサロンと出会うきっかけとなったのは、避難者の除雪について相談した事だった。米沢は雪の多い地域だが、福島の沿岸は暖かく雪があまり降らないため除雪の経験がない。そこで除雪ボランティアのプロを探していたところ、おいたまサロンの代表を紹介された。ボランティアで独居老人宅の除雪を組織的に取り組んでいるという。

避難者宅の除雪の相談に乗ってくれた後、「今後はサロンを避難者のためにもっと使おう、一緒に支えようじゃないか」と提案してくださった。それまでりとる福島の企画は山形市で行なっていたが、メリグリストは山形県全域に拡大しており、中でも山形市と米沢市にいる避難者の登録が多かった。米沢市の方々の登録は多いが、なかなか交流ができていなかったのでもっと良い機会だと思い、2011年の冬においたまサロンの1階で避難者の親睦会を開催させてもらった。その後、おいたまサロンの2階を改装して常設のサロンを設置するために、福島県の地域づくり総合支援事業に応募し補助対象事業として選ばれた。申請はおいたまサロンが行なった。りとる福島は小さな任意団体だが、おいたまサロンと一緒にいてくれる事で、米沢では手厚い支援体制が形成できていると思う。最初の助成金では2階の半分を改装して、避難者のフリースペースを確保する事ができた。現在はもう半分の改装も済んだところで、子ども達が元気に走り回っている。サロン運営は避難者のお母さん達が行なっており、通常の運営以外で過剰な援助は受けないようにしつつ、当事者が話し合いながらゆっくりと活動のアイデアを出し合っている。山形市でフリースペースを作る事ができなかったが、米沢市では居場所作りに参加できた。山形市はいろいろな団体が活動しているから、結果的に米沢市で活動してよかったと感じている。

現在抱えている課題

どうにもならない事だが、福島へ戻る方とまだ戻らない方がいる。それについて、団体の中でそれらに特定の方向性を示すようなコメントはしない。どちらにも事情があるし、それぞれに葛藤があると思う。さまざまな考えで自分の立ち位置を決めた彼らにどう寄り添っていくかは悩ましい課題だ。ふわっとの利用者は増え、サロンの中での盛り上がりは感じるけれど、日に日に世間の関心が薄くなってきている事も感じている。フリースペース開設から1年が経過し、来年も継続するだろうけれど、もう少し息の長い、中長期的視点で考えた寄り添いの仕組みが必要なのだと感じている。山形に住む事を決めた方も一定の割合存在するので、継続的な支援は必要だと感じる。一方で我々のような小さな団体は、公的な機関の理解がなければすぐに限界がきてしまうだろう。支援スタッフを派遣してもらう必要はない。今後、避難者サロンを避難者自らが運営する事はできる。しかし、インフラまで自分の家計から出すには無理がある。例えば、「ふわっと」では集まった皆で料理をして、一緒にランチを食べながら交流を深

めている。現在は県から助成金をいただき、1日約2000円の予算で20人以上の副菜を用意する他、愛知県日進市の団体からお米を支援していただき、そのお米を毎日炊いている。活動を継続していくためには、その他にもインフラを維持するための支援が必要だ。

震災を振り返って

震災をバネにして人生を変えられる人もいる。それはとてもすごい事だ。私はそこまで立派な人ではなく、震災をバネにするような下地は、自分にはないと思えた。ただ、震災を機に大きな決断をした皆さんと関わる事で、自分も変わりたい、と無意識に思ったかもしれない。震災後に原発について必死で情報を集めた自分の経験は、避難者の方々のサポートする取り組みには、活きた。子どものために自主避難をした皆さんは、ものすごい決断力と行動力のある方々だと思う。いろいろな思いが頭を駆け巡る中、彼らは車を走らせて山形にやってきた。しかしながら、その決断を自分で褒める機会を奪われたまま、時間だけが過ぎ去っている。僕は彼らの決断は間違っていなかったと思っている。起こった出来事に対する高い柔軟性と、素早い対応力、そして何より、必要だと思った事を実行に移す決断力を見せてくれた自主避難者の方々は、僕にとってはヒーローであり、尊敬すべき存在である。なるべく彼らに寄り添いながら、震災後の東北と一緒に生きていきたいと思っている。



撮影：2012.9.21 おいたまサロン「ふわっと」ランチで交流会